第28回（2019年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業

អរគុណ! តាត្រាវ

オークン！タトラヴ

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人　鹿児島県国際交流協会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
会長　**弓場秋信**
（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会　事務局長）

鹿児島県青少年国際協力体験事業は，平成３年にマレーシアに派遣以来，今年２８回目を迎えました。開発途上国で「国づくり，人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し，国際協力に対する理解を深めると共に，ホームステイ等での異文化体験，学校等での現地学生との交流を通して，国際性豊かな青少年を育成することを目的に，鹿児島県青年海外協力隊を支援する会，青年海外協力隊鹿児島県OB会，公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で実施しています。これまで，マレーシア，インドネシア，タイ，ベトナム，ラオス，カンボジア，スリランカの７ヶ国に県下一円から３４６名の中高生を派遣しました。

今年の派遣国は，本事業第３回目の派遣となるカンボジアです。１９５３年にフランスから独立し順調に国づくりを進めるも，１９７０年から１９９１年にかけての内戦と圧政による混乱，特に１９７５年から１９７９年のポルポト政権下での知識階級を中心とした大虐殺が，その後の国づくりに物心両面で大きな爪痕を残しました。悲しい歴史を乗り越え新たな国づくりに取り組むカンボジアに，日本を含む国際社会が様々な援助を行っています。その一つが，１９６５年に発足した青年海外協力隊事業です。事業発足と同時に派遣が始まったカンボジアは，前述の事情により中断されていた期間もありましたが，治安の回復を待って再開され，現在までに数多くの隊員が，人づくり・国づくり活動に汗を流しております。国際協力の最前線に触れられる現場として最適であるカンボジアを，今年度の派遣国に決定しました。

本事業の共催市である鹿児島市，鹿屋市，霧島市，枕崎市，南九州市，南さつま市，いちき串木野市から推薦の１２名と，企業の協賛を得ての実行委員会枠３名は，２回の事前研修でクメール語，カンボジア事情，青年海外協力隊活動と国際協力，日本・鹿児島について学び，７月２１日に鹿児島空港から仁川を経由してカンボジアを訪問しました。

団員は，プノンペンにある国際協力機構JICAカンボジア事務所で，カンボジアにおける青年海外協力隊事業や国際協力等について学んだ後，シェムリアップ州プラサットバコン郡に位置するホームステイ先に移動しました。一人でホームステイする４泊５日の間には，バンテアイミンチェイ州シソポンの小学校で巡回指導を行う深町隊員，プノンペンのボントラベック中学校で体育隊員として活躍している井上隊員の現場訪問，サマキーミンチェイ小学校での運動会視察や学校交流を行っています。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたことが綴られた報告書『オークン！タトラヴ（អរគុណ!តាត្រាវ）』を作成致しましたので，多くの皆様にご覧いただければ幸甚に存じます。

終わりに，本事業実施に当たりご支援ご協力をいただいた共催市，協賛企業，国際協力機構JICA九州センター，JICAカンボジア事務所，心温まるもてなしでホームステイを受け入れていただいたカントラン地区タトラヴ村の皆様，そして活動中の青年海外協力隊員はじめとする多くの関係者に，心より感謝申し上げますとともに，今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

もくじ

はじめに
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会　会長　弓場　秋信

ごあいさつ…… 1
鹿児島県ＰＲ・観光戦略部　部長　木場　信人

第28回（2019年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要…… 2
参加団員等名簿…… 3
スケジュール…… 4
地図…… 5
体験事業ドキュメント（総集編）…… 6
～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと…… 17
「カンボジア・ゴミに隠れた事実」　六反田　基　世
「カンボジアで見つけた幸せの在り方」　前　薗　真　鈴
「私にできることとは」　岡　田　綾　香
「感無量のカンボジア」　渡　邉　望　未
「私がカンボジアで感じたこと」　下　山　千　晴
「人々の温かさに触れて」　田　中　いぶき
「カンボジアで感じたこと」　田　代　佳　鈴
「本当の幸せとは」　鳥　居　彩　乃
「国際協力は受け入れることから」　関　田　伊　織
「私とカンボジア」　萩　原　華　音
「私はカンボジアが大好きだ」　岩　重　優　奈
「新しい自分とカンボジア」　岩　田　胡　桃
「発展途上国に触れて」　朝　岡　里　紗
「カンボジアで学んだこと」　三　浦　香　苗
「オークン（ありがとう）」　井　上　柊　哉

団長報告…… 32
「カンボジア王国での７泊８日」
寺園　直喜　（公益財団法人鹿児島県国際交流協会　専務理事）

同行者感想…… 33
「オークン(ありがとう)！そして,チョールチェット(好き)」　丸　野　里　美
「国際協力体験事業の意義」　佐　藤　貴　之
「カンボジアを通して見えたこと」　吉　原　久美代
「笑顔の大切さ学んだカンボジア」　山　田　天　真
「驚きばかりのカンボジア」　髙　吉　友　佳

新聞記事（南日本新聞）…… 38

参考資料
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要…… 44
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績…… 45

ごあいさつ

鹿児島県ＰＲ・観光戦略部長
木　場　信　人

「第28回（令和元年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

これも，事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ，関係者の御支援・御苦労の賜であり，心から敬意を表します。

また，皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力の取組をはじめ，本事業に代表される青少年の海外体験の促進や海外協力隊員の支援などに格別の御協力をいただいていることに対して，この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では，７月21日から７月28日まで７泊８日間の日程で，カンボジアを訪問し，現地で青少年活動，体育の指導活動を行っている青年海外協力隊員２人の活動現場を視察されたほか，現地家庭でのホームステイ，現地の小学生との交流等を体験してこられました。

カンボジアは，1953年に正式に日本との国交が樹立されて以来，良好な関係が続いております。今年はカンボジアを含むメコン地域諸国と日本で実施した「日メコン交流年」から10周年で幅広い分野の交流事業が実施されていることなどからも，日本とカンボジアの関係はより一層親密になっていると思います。今回の事業はこれにも貢献しています。

団員の皆さんは，７月31日に県庁を訪問し，私と前田光久県教育次長に帰国報告をされました。皆さんからは，カンボジアの人々の心の温かさや，歴史・生活習慣・文化の違いによる戸惑い，援助のあり方についての考え方，日本とカンボジアそれぞれの価値観の違いから気がついた新たな発見など，たいへん興味深いお話をお聞きすることができました。皆さんのふるまい，報告は大変立派で感銘を受けました。成長されたことが窺えます。

今回の訪問で，団員の皆さんが実際に自分の目で見て，感じ，考えてきたことは，実際に現地へ足を運ばなければ体験することのできない，たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み，実行委員会の方や御家族，渡航先でお世話になった方など事業実施を支えてくださった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず，今後も国際交流・国際協力や国際社会等についての学習を深められ，それらの担い手として，将来，御活躍いただくことを希望しております。

近年，グローバル化が急激に進展するとともに，県内の在留外国人の方々も急増していることなどから，県民の皆様方が国際理解を深め，多文化共生を進めていくことがますます重要になってきています。県では，今後とも，これに対応する必要な取組を積極的に進めてまいりたいと考えておりますので，皆様の一層の御協力をお願いいたします。

最後に，「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のますますの御発展と，関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御健勝・御活躍を祈念いたします。

第28回（2019年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

1 主　　催　鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※　構成団体　鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

2 共　　催　鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，枕崎市教育委員会，
霧島市国際交流協会，南さつま市友好交流推進協議会，
南九州市教育委員会，いちき串木野市国際交流協会

3 後　　援　鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構九州センター

4 協　　力　在日本カンボジア王国大使館

5 協　　賛

㈱鹿児島銀行	城山観光㈱
鹿児島空港ビルディング㈱	南国殖産㈱
鹿児島トヨタ自動車㈱	㈱ Misumi
鹿児島ヨコハマタイヤ㈱	㈱南日本銀行
キンコ-醤油㈱	㈱山形屋
小正醸造㈱	㈱レイメイ藤井
薩摩酒造㈱	弓場貿易㈱
㈱下堂園	

6 事業の流れ

４月～５月	募集・団員決定
６月１５日（土）	第１回事前研修
７月　６日（土）～７月　７日（日）	第２回事前研修
７月２１日（日）	出発
７月２８日（日）	帰国
７月３１日（水）～８月２０日（火）	表敬訪問
８月１８日（日）	報告会
９～１０月	報告書作成

7 派 遣 国　カンボジア王国

8 派遣期間　２０１９年7月２１日（日）～7月２８日（日）

9 派遣人員　(1) 参加者　１５名
(2) 引率者　　６名

参加者団員等名簿

■団　員

	名　前	性別	学　校	学年	市　町
1	六反田 基世（ろくたんだ もとよ）	女	鹿児島純心女子高等学校	3	鹿児島市
2	前薗 真鈴（まえぞの まりん）	女	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	2	鹿児島市
3	岡田 綾香（おかだ あやか）	女	鹿児島市立鹿児島玉龍中学校	3	鹿児島市
4	渡邉 望未（わたなべ のぞみ）	女	鹿児島県立鹿屋高等学校	2	鹿屋市
5	下山 千晴（さがやま ちはる）	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	枕崎市
6	田中 いぶき（たなか）	女	神村学園高等部	1	枕崎市
7	田代 佳鈴（たしろ かりん）	女	クラーク記念国際高等学校	3	霧島市
8	鳥居 彩乃（とりい あやの）	女	霧島市立舞鶴中学校	3	霧島市
9	関田 伊織（せきた いおり）	男	鹿児島県立加世田高等学校	3	南さつま市
10	萩原 華音（はぎはら かのん）	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	南九州市
11	岩重 優奈（いわしげ ゆうな）	女	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	2	いちき串木野市
12	岩田 胡桃（いわた くるみ）	女	いちき串木野市立串木野中学校	1	いちき串木野市
13	朝岡 里紗（あさおか りさ）	女	鹿児島県立与論高等学校	2	与論町
14	三浦 香苗（みうら かなえ）	女	鹿児島県立指宿高等学校	1	指宿市
15	井上 柊哉（いのうえ しゅうや）	男	龍郷町立赤徳中学校	1	龍郷町

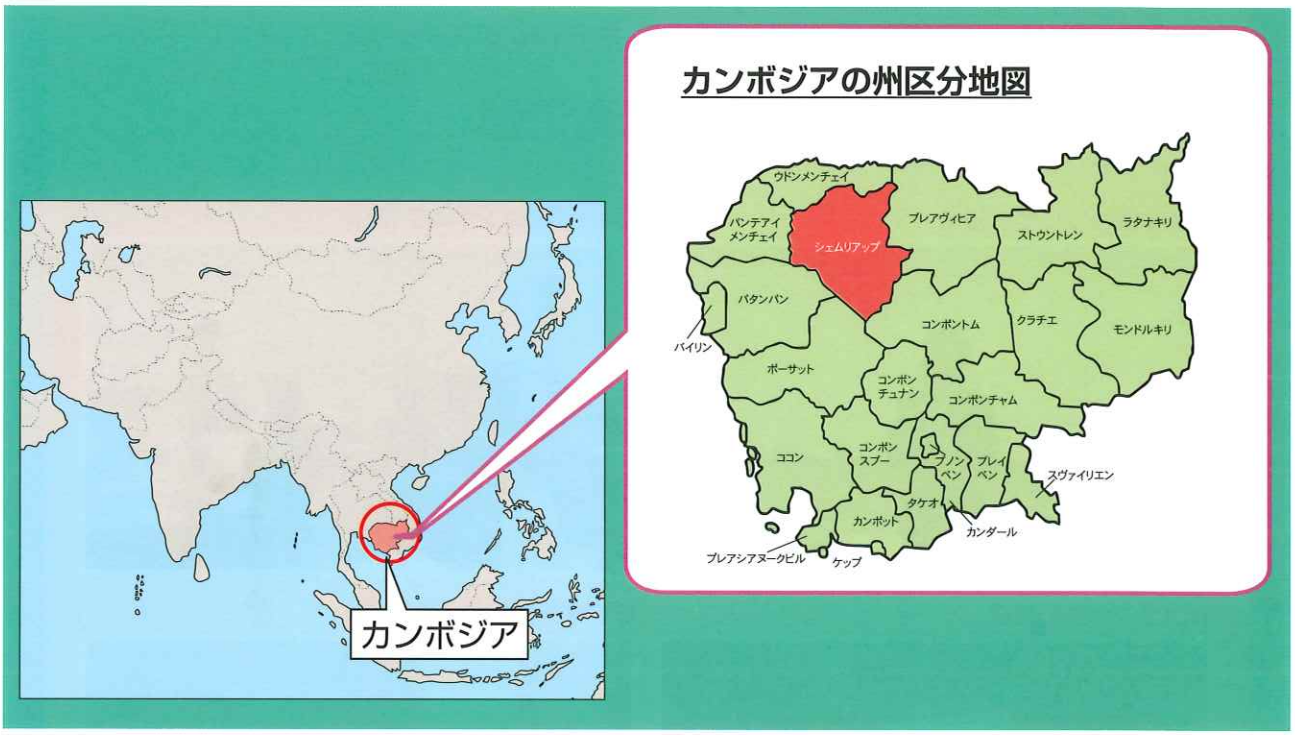
■同行者

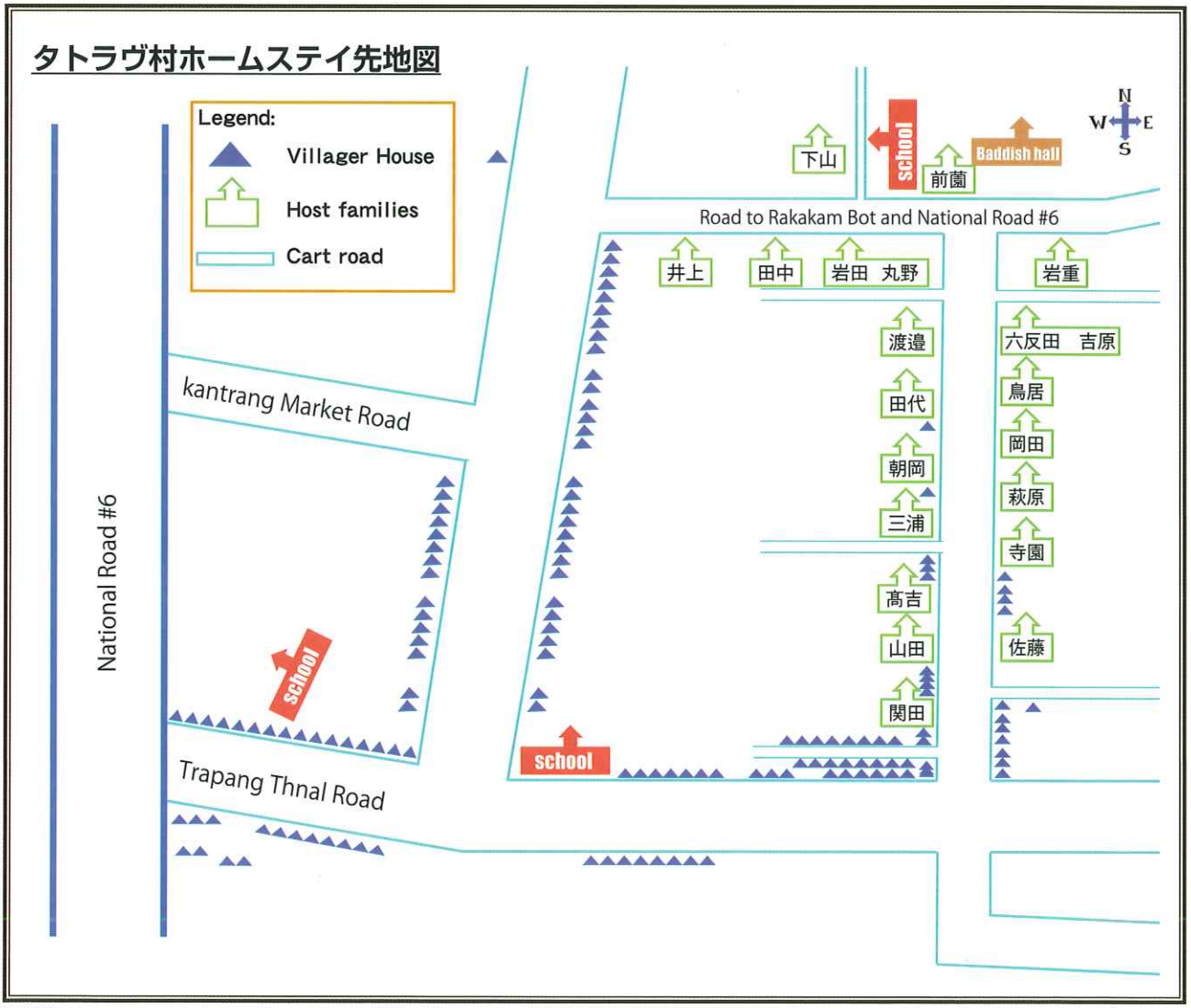
		名　前	性別	備　考
1	団　長	寺園 直喜（てらぞの なおき）	男	（公財）鹿児島県国際交流協会　専務理事
2	調　整	丸野 里美（まるの さとみ）	女	いっしょき学校を作いもんそ会　事務局長 青年海外協力隊カンボジア OG　（小学校教諭）
3	調　整	佐藤 貴之（さとう たかゆき）	男	三島村大里中学校　教諭 青年海外協力隊カンボジア OB（野球）
4	健康管理	吉原 久美代（よしはら くみよ）	女	病院勤務 青年海外協力隊ルワンダ OG（公衆衛生）
5	マスコミ	山田 天真（やまだ てんしん）	男	南日本新聞社　編集局文化生活部　記者
6	マスコミ	髙吉 友佳（たかよし ゆか）	女	鹿児島テレビ放送　報道制作局報道部　記者

スケジュール

月　日	曜	地　　名	時　刻	交通機関	内　　容	宿　　泊
7月21日	日	鹿児島空港 仁川（仁川国際空港） 仁川（仁川国際空港） プノンペン（プノンペン国際空港）	13:55 14:00 15:55 発 17:30 着 18:40 発 22:10 着	KE786 KE689 バス	集合 結団式 チェックイン ホテルへ移動	ホテル
7月22日	月	プノンペン シェムリアップ州 プラサットバコン郡 カントラン地区タトラヴ村	9:00-10:40 10:40	バス	JICA カンボジア事務所表敬 ホームステイ先へ移動 入村式（ホストファミリーと対面）	ホームステイ
7月23日	火	シェムリアップ バンテアイミエンチェイ州 シソポン タトラヴ村（シェムリアップ）	7:00 発 9:00-13:00 12:00	バス	青年海外協力隊活動視察 【青少年活動　深町 菜摘　隊員】 場所：オーオンバル小学校 昼食（隊員との食事会）	ホームステイ
7月24日	水	シェムリアップ バンテアイミエンチェイ州 ポイペト タトラヴ村（シェムリアップ）	7:30 発 10:30-13:00	バス	運動会視察・小学校交流 場所：サマキーミエンチェイ小学校	ホームステイ
7月25日	木	シェムリアップ タトラヴ村（シェムリアップ）	8:00 発 9:00-11:30 12:00 18:00-20:00	バス	シェムリアップ視察 （アンコール・ワット　他） 昼食（ホストファミリー宅） ホストファミリーと過ごす お別れ会	ホームステイ
7月26日	金	シェムリアップ ｼｪﾑﾘｱｯﾌﾟ（ｼｪﾑﾘｱｯﾌﾟ国際空港） プノンペン	6:00 発 8:15 発 9:00 着 12:00-13:00 14:30-16:30 18:00	バス LQ670	村とのお別れ 昼食（Tonle Bassace2 Restaurant） 青年海外協力隊活動視察 【体育　井上 大地　隊員】 場所：ボントラベック中学校 夕食（Kravanh）	ホテル
7月27日	土	プノンペン プノンペン（プノンペン国際空港）	8:00 発 9:00-12:00 12:00-13:00 13:30-15:30 18:00-19:00 23:20 発	バス KE690	プノンペン視察 （トゥールスレン博物館　他） 昼食（プノンペン周辺） プノンペン視察（バザール） 夕食（Titanic Restaurant）	機内泊
7月28日	日	仁川（仁川国際空港） 仁川（仁川国際空港） 鹿児島空港	6:40 着 13:05 発 14:40 着 15:00	KE785	解団式	

地　　図


カンボジアの州区分地図
ウドンメンチェイ
バンテアイメンチェイ
シェムリアップ
プレアヴィヒア
ストウントレン
ラタナキリ
バタンバン
コンポントム
クラチエ
モンドルキリ
バイリン
ポーサット
コンポンチュナン
コンポンチャム
ココン
コンポンスプー
プノンペン
プレイベン
スヴァイリエン
タケオ
カンポット
カンダール
プレアシアヌークビル
ケップ
カンボジア


タトラヴ村ホームステイ先地図
Legend:
Villager House
Host families
Cart road
N
W
E
S
下山
school
前薗
Baddish hall
Road to Rakakam Bot and National Road #6
井上
田中
岩田　丸野
岩重
渡邉
田代
朝岡
三浦
高吉
山田
関田
六反田　吉原
鳥居
岡田
萩原
寺園
佐藤
kantrang Market Road
National Road #6
school
Trapang Thnal Road
school

体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

6月15日（土），7月6日（土）～7月7日（日）
第１回・第２回事前研修

体験事業についての説明

語学講座（カンボジア語）

カンボジア文化講座

青年海外協力隊　体験談

日本とカンボジアについて調べ学習発表

リーダー選出

現地での出し物の話し合い

事前研修を終えて

7月21日（日）
結団式・出発

「初めての飛行機でとても緊張した。でも、もとよちゃんとあやかちゃんが手をつないでくれて大丈夫だった。カンボジアの空港に着いた時、少し甘いような匂いがした。クメール語が一面に見られた。大きな空港で都会のように感じられた。」　前薗　真鈴

7月22日（月）
午前：JICA カンボジア事務所　訪問

「支援をする上で大切なことは、あくまでも要請主義であることを忘れないことであると知った。自分たちが支える必要が、ある程度無くなるくらい人々が自力で活動できるようにサポートすることが重要だと改めて感じた。JICA のやりがいや良さを実際に活動している方々から聞くことが出来たのが良かった。」　下山　千晴

7月22日（月）
午後：入村式・ホストファミリーとの対面（タトラヴ村）

「6時間くらいプノンペンからシェムリアップへ行くまでの間に建物の作りがだいぶ変わった。畑がだんだん多くなり、初めてヤシの実を見た。村に近づくと舗装道路ではなくなった。水牛がそこら辺を歩いているのに驚き。」　　朝岡　里紗

「4人家族で犬がいた。何て言ってるのか全く分からず不安が大きくなった。室内の明かりが1つしかなく、寝室はもれた明かりしかない。子供も見たが、家の子か分からない。」　　田代　佳鈴

7月23日（火）

午前：青年海外協力隊活動現場視察　（深町菜摘　隊員・青少年活動）
オーオンバル小学校

「バスが校門に入った瞬間たくさんの子供たちが一斉に出て来て驚いた。歩いていたら手をつないでくれた。皆かわいらしい純粋無垢な目をしている。将来なりたいものの絵の中に大学卒業のときの絵があった。」

萩原　華音

「学校内にゴミがたくさん落ちていたり、グラウンドの状態が悪かったりと、日本とは違い驚くことが多かった。学校のポスターに日本の国旗があって嬉しかった。深町さんの活動はとても興味深かった。」　鳥居　彩乃

7月24日（水）

終日：運動会視察・小学校交流
サマキーミエンチェイ小学校

「言葉は通じなくてもこんなに一緒に楽しくなれるんだなぁと驚いた。日本では経験できないことだと思う。」　三浦　香苗

「元々学校の地域は地雷がすごすぎて人が居なかった。他の地区で過ごせないくらい貧しい人（が住んでいる場所）。制服などが揃っていたのは寄付金や先生達が給料から買ってあげたり、ちょっと裕福な家族が買っていた。半分以上は（自分たちでは）買えない。」

六反田　基世

7月25日（木）

午前：シェムリアップ視察（周辺観光）
アンコール・ワット

「装飾がとてもきれいに施されている。あんなにも重い石を運んできたことに驚いた。」
関田　伊織

「壁画がしっかりと物語になっている。戦争系が多い。内戦の銃弾の跡があってびっくり。」
田中　いぶき

7月25日（木）
午後：ホストファミリーと過ごす

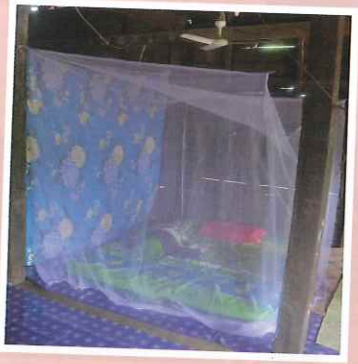
「お肉にちょっと塩辛いソースみたいなものをつけて食べた。おいしかった。お散歩して、初めて会う人もフレンドリーに話しかけてくれて嬉しかった。」　岩重　優奈

「私と一緒に食べるためにずっと待ってくれていた。本当にうれしかった。指差し会話帳を指してご飯の名前を教えてくれた。私が質問しても、何と返事しているのか分からなくてすごく申し訳なかった。それでも一生懸命伝えようとしてくれていた。」

朝岡　里紗

「私の好きな食べ物をたくさん作ってくれて嬉しかった。日本語で私に一生懸命話してくれた。」　鳥居　彩乃

「ホストファザーが私が帰って来た時日本語でおかえりと言ってくれたのに感動した。テーブルの上の画用紙に日本語の練習をしたものがあって感激した。」　三浦　香苗



7月25日（木）
夜：村とのお別れ会

「明日は村の人とお別れだと思うと何とも言えない気持ちになる。1日目に思っていたことがおかしく思える。」

下山　千晴

「最後の30分間のダンスがとても楽しかった。今では日本へのホームシックではなく、タトラヴ村シックになりそうだ。」

渡邉　望未

7月26日（金）
午前：村とのお別れ

「最初は大丈夫かな?と不安でいっぱいだったが、最後は村の生活に慣れてとても離れたくなかった。お姉さんが泣いているのを見て自分もたくさん泣いてしまった。」

岩田　胡桃

「ホームステイを通して、優しさは壁を超えるのだと思った。ファミリーの笑顔が大好きで一緒に笑い合った日々が本当に幸せで楽しかった。この体験、家族を絶対に忘れません。」

六反田　基世

7月26日（金）

午後：青年海外協力隊活動現場視察　（井上大地　隊員・体育）
ボントラベック中学校

「国際協力に今まで以上に興味を持つことが出来た。たくさん勉強して夢を叶えて、自分の技術で生活が豊かになる人が一人でも増えて欲しいと思った。」

田中　いぶき

「幸せの基準が下がったとおっしゃっていて、納得・共感した。青年海外協力隊は理科の分野もあるらしいので、興味が湧いた。」

岩重　優奈

「青年海外協力隊の活動内容について詳しく知れた。〝自分の軸をしっかり持っていれば振れ幅が大きくてもブレずにいれる〟若い今だからこそこの軸を作るために多くの経験をする。いろんなことに触れる。」

萩原　華音

7月27日（土）
プノンペン視察（周辺観光）
トゥールスレン博物館他

「ポルポトは悪い人ではなかった。でもやり方を間違えた。」と話す人もいて驚いたという話を聞いた。　井上　柊哉

「カンボジアに暗い歴史があるのは知っていたが、ここまで奥が深いことは知らなかった。」　岩田　胡桃

「TOYOTA、NISSAN、日本の企業がとても多い。」　関田　伊織

7月28日（日）
帰国・解団式

「これから私は何ができるか、これから考えていこう。そしてもう一度カンボジアに行きたい!」　岡田　綾香

7月31日（水）～8月20日（火）
表敬訪問

8月18日（日）
報告会

「改めて日本について知らないことがたくさんあると分かったので、まずは日本が今どういう状態なのか政治や教育などについて考えていきたい。」
田代　佳鈴

「広い視野を持った人になったかはまだ分からないが、それは私自身の行動にかかっていると思う。このスタディツアーを通して、自分の進みたい道、進むべき道が明らかになった。せっかく持てた夢を台無しにしないよう、私にできる精一杯の努力をしたい。」
岩重　優奈

「言葉は通じなくても伝えようとする強い気持ちがあればコミュニケーションはとれること、便利なものが無くても幸せに暮らせること、便利なものを求めすぎている私達はとどまるべきであることを強く思った。団員達や村の人々出会いに感謝しようと思う。」
前薗　真鈴

団員が感じたこと

カンボジア・ゴミに隠れた事実

鹿児島純心女子高等学校３年
六反田　基世

私は去年，体験事業でスリランカに行った先輩の卒業式での答辞を聞いて鳥肌がたった。自分が知らない世界がこんなにあるのかと驚き，私も知りたいと興味が沸いた。カンボジアへ行く前に先輩は私に「人生変わるよ。」と言ったが，その時はその言葉の意味が全く理解できなかった。帰ってきた今，私は来年行く人に同じことを思わず言ってしまうだろう。

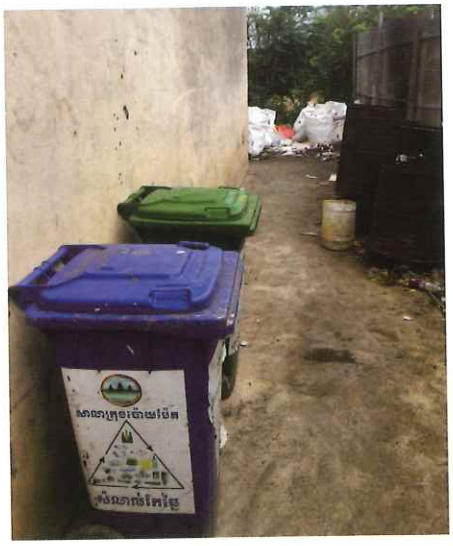
まず，私がカンボジアに着いてバスの中からの景色で目に付いたものは，街中にゴミが散乱している風景だ。街の至る所にゴミが落ちていた。なぜゴミを集めないのだろう，なぜ処理をしないのだろうと，様々な疑問をもった。

疑問が解けたのは，四日目に訪れたサマキーミンチェイ小学校での出来事がきっかけだ。この小学校は，以前は地雷区域にあり，裕福な人は住みたがらないアメリカのスラムのような地域だった。しかし，寄付などにより整備が進み，今では人気の小学校となった。実際に自分も訪れたが，とても綺麗な小学校という印象をもった。しかし，裏に回ると，そこには大量のゴミが散乱していた。私はこの差に戸惑いを隠せなかった。ふと横をみるとゴミ箱が二つ並んでいた。中を見てみると，ゴミ箱の中身は空だった。生徒に「これは何？」と聞くと「わからない。」と首を振り，傾げていた。彼らはゴミ箱という存在を知らないのだと思った。その理由は国民的習慣に表れていると感じた。

カンボジアでは，ポイ捨てが当たり前とされ，日常茶飯事に行われている。また，ゴミを処理する施設を建設･運営する為には多額の資金が必要となるため，ゴミは問題視されているが対策がほとんど取られていないのが現状だ。それだけではない。カンボジアでは対策がほとんど取られていない為，ゴミを燃やす。プラスチックやポリ容器など有害物質が出るのもお構い無しだ。このままでは数十年後には，カンボジアの生活や環境は修復不可能な状態になってしまう。

私は，大学でカンボジアのゴミ問題について４年間研究したいと考えている。多くの愛に触れ，また温かい優しさで包み込んでくれたカンボジア。私は，そんなカンボジアが大好きだ。村での生活を通して，「優しさは言語を超える」と思った。それくらい，村人全員が優しく，家族のように接してくれた。私は，村での生活が楽しくて仕方なかった。こんな経験をさせてくれたカンボジアに，私が研究したことを少しでも役に立たせ，恩返しすることができたら嬉しい。

行く前までは，こんなに別れが辛くて大泣し，腹筋が割れるかと錯覚するほど大笑いするとは思いもしなかった。また，自分自身と向き合い悩む経験をしたことは，人生の大きな第一歩となるだろう。私にとってカンボジアの思い出や共に過ごしたメンバーとの出会いは宝物だ。



小学校の裏側の様子（手前：ゴミ箱／奥：ゴミ）

村でのお別れ会　本人：前列左から２番目

団員が感じたこと

カンボジアで見つけた幸せの在り方

鹿児島中央高等学校２年
前薗　真鈴

外国へ行くこと。これは私にとって，初めての貴重な体験となった。

鹿児島空港を出発し，約４０００㎞離れたカンボジアに着いた。私はとても心が躍っていた。しかし，私にとってタトラヴ村でのホームステイは，楽しみではあったが不安な気持ちの方が大きかった。

二日目，私たちはバスに乗り，タトラヴ村へと向かった。バスが村に到着した時，笑顔で私たちを待ってくれていたタトラヴ村の方々の姿があった。ホストファミリーと対面する時，私のホストマザーは私の手を握ってくれた。また私がホストファミリーの家に着いた時，家にいたホストブラザー，ホストシスターが笑顔で迎えてくれた。私は優しさを感じとても嬉しかった。しかし，村に着いたその夜，私は衝撃を受けた。それは，トイレと水浴びである。トイレは桶から水を汲み，その水で流した。日本ではトイレはレバーをひねれば水が流れる。また，水浴びは桶にある水で髪の毛や体を洗った。日本との違いを感じる出来事だった。しかし，私の不安な気持ちや緊張は，ホストファミリーと過ごしていくうちにだんだんと無くなっていった。私のホストファミリーの中に４才になったばかりのホストシスターがいた。そのホストシスターは，会った時からずっと私について来てくれて，私たちはたくさん遊んだ。言葉はあまり通じなかったけれど，心は通じ合えて本当に嬉しかった。初日は少し辛かった水浴びやトイレも，二日目から徐々に慣れて当たり前のようになった。私が一番嬉しかったのは，三日目に私のホストシスターのお姉さんが家に来た時，お姉さんが指差し会話帳で「妹」という文字を指して「あなたは私たちの妹だよ」と言ってくれたことだ。私を家族として迎えてくれているということが感じられて，とても嬉しかった。言語の壁を超えて楽しい時間を共有することができ，幸せだった。私は，「タトラヴ村のことが本当に大好きになったのだな。」と強く思った。

私は，このホームステイの四日間を通して「幸せ」について改めて考えさせられた。今までの私の生活は，テレビやお風呂，クーラーがある生活が当たり前だった。しかし，村には日本では当たり前にあるものが無かった。それでも私が過ごした村での四日間は，日本にいるときよりもとても楽しく，充実していて，幸せを感じることができた。村の人たちも同様に，毎日笑顔で幸せに暮らしていた。発展途上国は大変な国だと思う人が，まだ周りには多くいるのではないかと思う。私は，幸せには様々なカタチがあって「便利な物が多いから幸せだ」という考えは違うのだということを多くの人に伝えたい。また，今の私には学校に行って勉強をしたり，部活動をしたりできる環境が目の前にある。この環境がある日本に生まれてきた私だからこそ，一生懸命勉強し，将来カンボジアに恩返しがしたい。今回，私はカンボジアへ行き，貴重な体験ができて本当に良かったと思う。最後に，私にカンボジアへ行く機会を与えてくださった多くの方々，そして一緒に活動してくれた団員に感謝したい。オークン（ありがとう）。

ホストファミリーと一緒に　本人：中央

ホストシスターと一緒に　本人：右

私にできることとは

鹿児島玉龍中学校３年
岡田　綾香

「この小学校は水道があるのでまだ恵まれています。」オーオンバル小学校で，現地在住の青年海外協力隊深町隊員がおっしゃった言葉だ。蛇口をひねれば水が出ることは当たり前ではないと，知識として分かっていた。日本の学校には水道がある。水道点検の時には，水が使えないことに不満を言う。それがどれだけ贅沢なことかと思った。

現地滞在中に雨が降った日があった。舗装されていない道路は水浸しになっていた。バイクや自転車はぬかるんだ道でもスピードを出して走っていく。事故があったのか，横転したバイクもあった。大きな道路はへこんでいる場所がところどころあった。内乱が終わり，日本を含め，たくさんの国がカンボジアに支援を行った。横断歩道や信号機も設置されている。しかし，横断歩道は消えかかっていた。「横断歩道は人が安全に道路を渡るためのもの」というルールが浸透していないという。私たちも車道を横断した。カンボジアで教わった「支援は細く，長く現地に順応して続けなければいけない」という言葉に納得した。モノの支援も必要な時もある。それと同時に，技術，ルールも伝えなければ自立できないのではないだろうか。相手国のことを考えなければ双方にとって負担になると思った。

私がカンボジアに興味を持ったきっかけは，学校での社会の時間にトンレサップ湖という湖について聞いたことだ。雨季と乾季で湖の面積が 10 倍以上変わるという。そこには，水深に合わせて丈が変わる稲がある。訪問時の７月は現地の雨季にあたる。例年では雨が降り，田んぼには水が張っていると言われ，楽しみにしていた。しかし，実際にバスの中から見た風景は，想像していたどんな状況でもなく，水がなかった。稲は少し枯れかかっていた。雨季が１カ月以上遅れているそうだ。「もし米が取れなければ農家の収入がなくなる」と聞いた。

また，ホストファミリーの家に隣接している生活用水のため池について，「去年は真ん中まで水が溜まっていた」とホストマザーが教えてくれた。しかし，水は４分の１もなかった。異常気象で気候が変わっていることをカンボジアに行って初めて実感した。日本よりも自然と共存しているため影響を受けやすい。協力することは場所や産業によって変えていくべきだと考えた。

私は今まで，カンボジアを東南アジアの国の一つとしてとらえていた。今回の研修に参加しなければ，身近に感じることもなかっただろう。現地でもたくさんの発見と交流があった。言葉や文化が違っても家族のように接してくださったことは忘れない。必死にカンボジア語を教えてくれたホストシスターは，言葉が通じずに涙を流しそうだった。私も悔しくて泣きそうになった。私が知らない場所にも人が住んでいて，家庭があると痛感した四日間だった。

帰国してから，私にできることは何かと考えている。進路について新たに模索中だ。このような機会を与えてくださったすべての方々に感謝する。将来を迷える環境にいることを幸せに思いつつ，自分にできることは何か考え続けたい。

ホストファミリーと近所の方

小学校運動会にて　本人：中央奥

団員が感じたこと

感無量のカンボジア

鹿屋高等学校２年
渡邉　望未

「チョンムリアップスオ」
私が初めて覚えたクメール語だ。早くカンボジアに行って話したいと毎日ＣＤを聞いた。

ステイ先に着き，荷物を置いた。早速話しかけられたが，ホストマザーが何を言っているのかわからない。ホストシスターは恥ずかしがって目も合わせてくれない。「四日間ここで生活できるのだろうか」と大きなため息が出てしまった。

二日目，指さし会話帳を使いながら，どうにか洗濯をしたいとホストマザーに伝え道具を準備してもらったが，手洗いは初めてだった。ホストマザーも心配だったのか手伝ってくれた。それからは，指さし会話帳やジェスチャーを使ってコミュニケーションがとれるようになった。ホストシスターとも仲良くなりたくて，折り紙でくす玉作りをした。一から作るのは大変なので，日本で折った 12 個のパーツを組み立てて見せた。時間はかかったが，ホストシスターはずっと横で待っていてくれた。完成を一緒に喜び，笑顔で受け取ってくれた。言葉は通じなくても，私の一生懸命さは伝わったと思った。その後，折り紙や縄跳びで一緒に仲良く遊ぶことができた。

村を離れる前の晩，ホストマザーから「アンボック」という米菓子をもらった。それは隣のおばあちゃんにもらって食べたものだった。私が「おいしい。」と言っていたのを覚えていたのだと胸がいっぱいになった。日本の家族にも食べさせようと思い，大事にリュックに入れた。バスに乗る前，家に大切に飾ってあった結婚式の写真をホストマザーから渡された。何と言っているかわからないけれど，ホストマザーの涙を浮かべた顔を見て「これを見て私たちのことを忘れないでね」という気持ちが伝わった。

私はホストファミリーや村の人が，訪問する先々で温かく歓迎してくれたことがうれしかった。今度は自分が日本に来る外国人留学生や技能実習生などのサポートをしたいと思った。そのために英語以外の外国語も学びたいと考えるようになった。

私はカンボジアを知りたい，自分の視野を広げたいという理由で応募した。実際に観たアンコールワットはすばらしかった。トゥールスレン博物館で悲惨な歴史を知った。おびただしい頭蓋骨に恐怖しかなかった。帰国してから世界史の教科書を見たが，欄外に数行書かれているだけだった。実際に行き，見ること，知ることができてよかった，と思った。

たったの一週間だったが，団員のみんなとたくさん話し，刺激を受けた。青年海外協力隊の方から様々なことを学んだ。自分の意見や目標を持っていて格好よく思えた。

17 年間生きてきた中で一番充実し，たくさん泣いて笑った一週間だった。生涯忘れない体験ができた。私がカンボジアに行くにあたって支えてくれた方々に感謝します。「オークン！」

ホストファミリーと　本人：左から２番目

アンコールワットにて　本人：右

私がカンボジアで感じたこと

川辺高等学校３年
下山　千晴

私がこの事業に応募した理由は，将来の夢が幼児教育の仕事に就くことだからです。グローバル化に伴い，子どもたちはより他者を認め，尊重する態度を持たなければならないでしょう。子どもたちの多様性を活かした教育をするためには，まずは自分自身が外国へ行き，異文化を受け入れる寛容な態度を身につける必要があると思い，応募を決めました。

私は，この研修を通して大きく二つのことを感じ，学ぶことが出来ました。

一つ目は「便利＝幸せ」では無いということです。村でのホームステイは日本の生活とかなり違っていました。水洗式ではないトイレ，透明ではない水を浴びるお風呂，クーラーのない生活。慣れない生活に，初日は心が折れそうになりました。それと同時に「日本は便利だから幸せだな」と感じていました。でも，村での生活が幸せではなかったかと言うと，そうではありませんでした。ホストファミリーは本当の家族のように私を受け入れてくれ，村の人は手を振ったり挨拶を笑顔で返してくれたりしました。優しく，温かく接してくれたおかげで，とても充実した日々を過ごすことが出来ました。最後は村とのお別れが嫌だったほどです。

二つ目は，小中学校を訪れたり，村の子どもたちと一緒に遊んだりした時に感じたことです。学校に行きたくても行けない子ども，学校のトイレや校庭が整備されていないことなどがとても目立ちました。それに比べて日本ではみんなが学校に行けるし，学校の設備も整っていてとても良い環境があります。でもカンボジアの方が良いところもあると私は感じました。例えば，クーラーのない生活をしているため，日本の子どもたちに比べて暑さに強く，体力があるように感じました。発展のし過ぎもあまり良くないのではないかなと思うようにもなりました。

また，ホストシスターと友達に折り鶴の折り方を教えたり，村の子どもたちと縄跳びや「だるまさんがころんだ」をしたりしました。私が先にやってみるとみんな集中してやり方を見ていて，やりたい!!と積極的に挑戦する子どもも沢山いました。日本語にも興味を持って真似をしたり，私にクメール語を教えてくれたりしました。これはカンボジアの国民性で，朗らかで温和な人が多いため自然と影響されているのではないかと思います。逆に日本は発展すればするほど忙しくなって，相手を気遣う心が少なくなっているように感じます。

この研修を通して，勝手にイメージするより実際に肌で体験することの大切さや，恵まれた環境で生活していることを当たり前に思い，感謝することを忘れていたことや，無駄遣いの多さを改めて感じました。しっかりと自分の生活を見直していきたいと思います。

この事業への参加のために協力してくださった多くの方に本当に感謝しています。この体験は私の宝物です。本当にありがとうございました。

ホストシスターと友達との折り紙あそび　本人：後列左

おじいちゃん，おばあちゃんと　本人：中央

団員が感じたこと

人々の温かさに触れて

神村学園高等部１年
田中　いぶき

私は，このカンボジア研修で沢山の経験をすることができました。

仁川で飛行機を乗り換え，プノンペンに着いた時最初に思ったことは「え，普通に都会じゃん。本当に発展途上国なの？」ということです。これは誰もが感じていたようで，皆が口にしていました。

その日は立派なホテルでこれからのホームステイに向けて準備をし，ホストファミリーとの生活や小学校への訪問に心を躍らせていました。

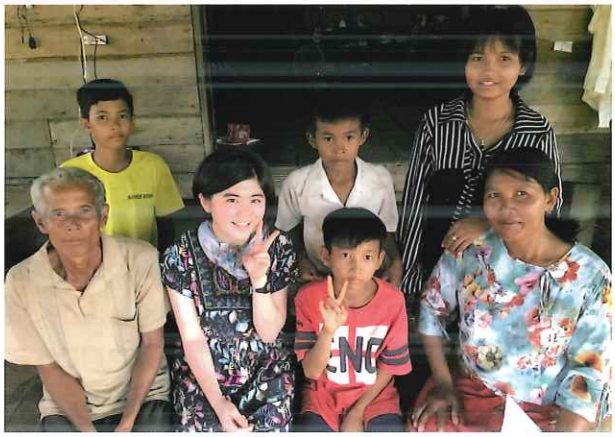
そしていよいよタトラヴ村に到着。ホストマザーが笑顔で出迎えてくれました。楽しみだったけれど，不安も沢山あったので，村の人たちの嬉しそうなニコニコした笑顔を見てすごく安心しました。日本では見たことのない初めての風景ばかり。道端に寝転がっている牛や犬，舗装されていない赤土の道，道の先に広がる広大な大草原，高床式の家，店ひとつ無い静かな村，どれもこれもが新鮮すぎて，現実味がありませんでした。

驚いたのはこれだけではありませんでした。ホストマザーにジェスチャーでお風呂に入りなさいと言われ，家の裏の牛小屋のすぐ近くにある小屋のようなところに連れていかれました。思わず，「えっ。」と声をあげてしまいました。なぜなら「これで水を浴びなさい。」と言われた方に目を向けると，濁った水に虫が浮いていたからです。トイレは日本の和式トイレよりも小さく，水は日本のようにレバーを押して流すのではなく自分で貯めてある水を流すようになっていました。便利な生活を知っている私たちにとって，事前研修で聞いていたとはいえ，やっぱり現実として目の前に現れると動揺を隠せませんでした。しかし，会長が出発前に私たちに笑顔でおっしゃった「カンボジアの文化を全て受け入れ，カンボジアを楽しんできてください。」という言葉を思い出し，「その通りだな，こんな経験，二度と出来ないかもしれない。」と思い，初めての水浴びを楽しむことが出来ました。

水浴びに関してすごく印象に残っていることがあります。それは，スコールで土がぬかるんでいた日のことです。水浴びが終わり，家に戻ろうと地面を踏んだ途端，土が柔らかくなっていたせいでせっかくのお風呂上がりなのに足が土まみれになってしまいました。足を洗いたいけれど水はその小屋にしかないので，戻るに戻れなかったことが忘れられません。こんな生活をずっとしていたのかと思うと，日本はどれだけ恵まれていて，どれだけ裕福な生活を送っているのかということを改めて身にしみて感じました。

本当にあっという間だった四日間のホームステイ，別れがこんなに辛いと思ったのは初めてです。日本に比べたらずっと不便かもしれない，だけど皆とても幸せそうでした。

カンボジア研修を通して，人の温かさ，優しさ，幸せの形の在り方，また，まだまだ残っている課題などを沢山感じることができました。この経験を活かし，自分の夢である技術者となってまたカンボジアに貢献できたらいいなと思います。一生忘れることのできない，素晴らしい経験になりました。



ホストファミリーと　本人：前列左から２番目

村の道路

カンボジアで感じたこと

クラーク記念国際高等学校３年
田代　佳鈴

私がカンボジアで感じたことは，みんな温かく，家族をとても大切にしているということです。村に着いた初日，ファミリーが何かを一生懸命伝えようとしてくれているのは分かるのですが，どうしても意味が分からず，とてもやるせなく思っていました。しかし，それでもファミリーが，ずっとにこにこしながら，今度はジェスチャーも使ってどうにか伝えようとしてくれていることがとても嬉しくて，私も同じくらいの気持ちでぶつかろうと思いました。

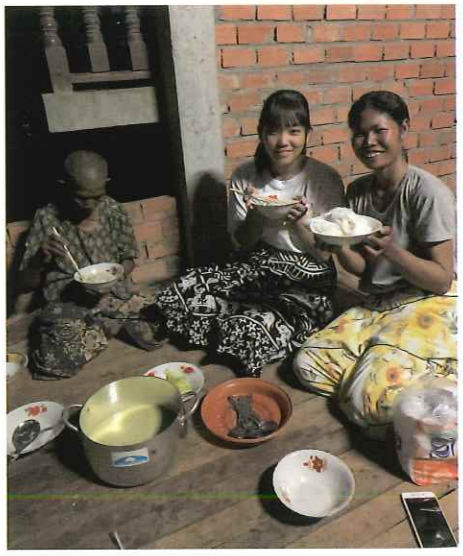
私のステイ先では，夜ご飯は絶対に家族が全員揃ってから食べていて，食べ終わった後もみんなでそのまま一緒にテレビを観たり話をしたりしていました。親戚も近くに住んでいるので，毎日いろんな人が集まって来て，とても賑やかな時間を過ごしました。その時間に，お土産として持っていったカレンダーを使って日本について教えたり，ファミリーたちのスマートフォンを使ってクメール語を教わったり日本語を教えたりしました。上手く言葉が話せなくても，笑う人も馬鹿にする人もなく，むしろ教えてくれたり，上手く言えた時にはたくさん褒めてくれたりしたので，一緒に会話をとても楽しむことができました。私は村のことがとても好きになりました。

四日間のホームステイ中に現地の小学校に視察に行った際，三つの小学校で青年海外協力隊として勤務している深町菜摘隊員から聞いた話の中に，「先生達が定時で帰るときの理由のほとんどが家族関係」というものがありました。奥さんや子どもが風邪を引いたら，その風邪の程度に関わらずみんなすぐに帰るそうです。日本ではよく思われないことが，カンボジアでは当たり前に受け入れられている，この差は何だろうと思いました。また，先生が自分の子供を学校に連れてくることがあるそうで，その時には生徒が面倒をみてくれたり，年配の先生が子育てのいろんなことを教えてくれたりするとのことで，みんな基本的に「家族が一番，仕事は二番」とおっしゃっていました。深町隊員は，カンボジアのそういったところは良い所だと思うとおっしゃっていて，私もそれはとても素敵なことだと思いました。

村とのお別れの日，もうすでに大好きになっていたファミリーとの別れはとても寂しく，できるならばまだ帰りたくない気持ちでいっぱいでした。しかし，そう思えるのも全てあの素敵なファミリーと過ごせたからです。本当に心から感謝しかありません。

この四日間のホームステイを通して，知らなかったカンボジアならではの良さを知ることができ，また，日本から出ることで改めて，日本についてもっと知ろうと思うことができました。今の私にできることは，カンボジアで見つけた良さをどんどん外に発信していくことだと思います。この経験を無駄にしないようこれからも行動を続けたいと思います。そしていつかまた，どんな形でもカンボジアへ行きたいと思います。

集まってきた親戚と知人　本人：左から２番目



家族との晩ご飯　本人：中央

団員が感じたこと

本当の幸せとは

舞鶴中学校３年
鳥居　彩乃

みなさんは，カンボジアと聞いて何を思い浮かべるであろうか。おそらく多くの人は，発展途上国やら，アンコールワットやらを思い浮かべるだろう。私も今回の派遣事業に応募する前までは，そのうちの一人であったと思う。

「青年海外協力隊の活動視察・ホームステイ・農村での交流」学校で配布されたプリントを見て，この体験は私を大きく変えてくれるだろうと思い応募をした。自分自身，海外でのホームステイは初めてではなかったため，初めはあまり心配や不安はなかったが，派遣が決まり，カンボジアについて調べたりカンボジアに詳しい先生に話を伺ったりする中で，本当に私が乗り越えらえるのかと急に不安になった。しかし，第一回研修，第二回研修で一緒に８日間を乗り越える仲間とクメール語を勉強し，お互い課題研究を発表することで，絆が深まり楽しみという気持ちが不安に勝っていった。カンボジアに着いて，直ぐにバスに乗り込んでプノンペン市内を走り，宿泊先へ向かった。その間に日本では有り得ない光景を目の当たりにした。町中に数えきれないほどのごみがそこら中に捨てられているのだ。そんな驚きから始まったカンボジア派遣。そこから私は今の生活の有難さを実感することになる。

首都から私たちがホームステイする村までバスで移動した。バスから見える景色の変化は著しかった。村に近づくにつれ，道が整っていない場所も多くあり，改めて発展途上国ということを感じさせられた。村に着いてまず嬉しかったことは，私のホストマザーがまだ写真しか見たことはないであろうに，私を見て笑顔で手を振ってくれたことだ。そしてホームステイが始まった。私のホストファミリーは，私にまるで家族のように接してくれる。言葉が通じなくても困っていたら助けてくれたり，私がクメール語で伝えるときに最後まで何も言わずに言い終わるのを待っていてくれたり，本当に私は村にいる間ずっと幸せだった。その時点で「幸せ」の基準が自分自身間違っていることに気づいた。日本にいたときは，食べたいと思うものを食べることができる，生活しやすい環境で生活できる，必要なものはすぐ手に入る。そんな生活が「幸せ」だと思っていた。しかし，村の人はみんなと一緒にいられる，笑っていられるだけで幸せだと思っていた。私も村の人と一緒に生活をしていると，幸せだと思うことが日本にいるときよりも多くなった。それは，やはり昔の自分が持っていた基準の間違いに気づいたからだろう。すると今度は日本の生活の有難さも見えてきた。村ではシャワーがないため水浴びをする。私たちが視察した学校は，ゴミだらけで衛生的にも良いとは言い難かった。そう考えると私たちの生活環境はどれだけ有り難いことだろうか。

様々なことを気づかせてくれて，優しさをいっぱい感じさせてくれたカンボジア。大好きになったカンボジアの将来，支えられるような仕事に就きたいと思った。オークン

現地の小学生と　本人：三列目右

ホストマザーと　本人：左

国際協力は受け入れることから

加世田高等学校３年
関田　伊織

鹿児島空港に着いたとき，積極的に動くことができたと満足していた。だが，研修中は必死にこなすことでいっぱいで，ゆっくり考えるということまではできていなかった。まずは反省から書こうと思う。

六日目の夕食会。協力隊の井上隊員の話は帰国後に自分の行動を考えるヒントになった。井上隊員は「国際協力とは上から目線で助けに行くということでなく，互いに知り合って助け合うことである。すると互いに成長する。それが自分のためになる。そのために相手のことを受け入れなければならない。」とおっしゃった。「国際協力とは，現地の人の役に立つ支援をすることだ」という私の考えとは異なっていた。

井上隊員の言葉を聞いて，ホストファミリーとのやりとりを反省しなければいけないのだと気づいた。研修二日目，ホストファミリーのチョン・リーさんのお宅に着いたとき，もう外は暗くなり始めていた。夕食を食べ終えると，チョン・リーさんは私をトイレに案内し，トイレの横にある溜め水（用をたした後に流す水）で水浴びをしなさいとジェスチャーした。その水には虫が浮いていて，茶色く濁っているように見えた。「できれば浴びたくないな。」夕方には，現地の人々が外で水浴びをしていたので，私も外で水浴びをしたいとジェスチャーで伝えた。でも，何度もトイレでの水浴びを勧めてくる。とうとう私の希望が叶ったのだが，ホストファミリーの方が電灯を持ち，井戸水が冷たい時はお湯を加えてくれ，ファミリーに手間をかけさせることになってしまったのだと気がついた。トイレを使わせてあげるというのは，チョン・リーさんのおもてなしだったのだ。溜めてある水は冷たくなかっただろうし，個室で人目も気にせず，水浴びさせてあげようという心遣いだったのだろう。

私はこの出来事を忘れないでおこうと思う。将来，私は途上国の農業を支援したいと考えている。まずは相手を受け入れることから始めよう。

協力隊の深町隊員の言葉も印象に残っている。「カンボジアの道端にはごみが多い。そしてなんでも燃やしてしまう。先生も生徒も時間通りに授業に来ない。病院でも使った注射針をそのまま放置する。これらは学校で教えれば解決できることなのだ。」

人と比べないおおらかな心，それはカンボジア人の良いところであり，私も見習いたいと思う。時間を守って環境を整えるべきだというのは日本の価値観である。決して押し付けてはいけないが，相手を知ることで考えが変わるかもしれない。

人間は，知っているものの中からでしか物事を判断することはできないと言われている。だとするならば，カンボジア研修はこれからの私の考えの幅を大きく広げてくれたことだろう。

素晴らしい経験をさせてくださった皆さんへ。オークンチュナム。

お別れ会でホストファミリーと一緒に　本人：左

チョン・リーさんのお宅のトイレの写真

団員が感じたこと

私とカンボジア

川辺高等学校３年
萩原　華音

チョムリアップ スオ！

私は異文化理解や国際協力についての考えを実際に現地でしか得られないものから深めていきたいと思い，今回の研修に参加しました。

カンボジア――それは，血と汗と笑顔の国。そして前を向き歩み続ける国でした。先進国日本に住んでいるが故に，私は発展途上国に対してマイナスなイメージばかり持っていました。しかし現地を訪れ，実際に生活を体験してみることで，それらの固定概念は大きく取り払われ，本当に信じるべきは自分の目で確かめたものだけであることに気付かされました。これこそが研修の中での大きな収穫です。

特に印象に残っているのが村での四日間のホームステイです。言葉が上手く通じない中で，指さし会話帳やジェスチャーで互いに理解し合おうとする経験がとても新鮮でした。通じたときの喜びは大きく，言葉というよりは「心で会話」していました。私の 11 歳のホストシスターは，初日から様々なサポートをしてくれました。小学校で英語を習うらしく，お互いカタコトながらコミュニケーションをとっていました。「カノン」と上手く発音が出来ないのか，「カノ！」と呼び掛けてくれました。彼女のその声が今でも脳裏に焼き付いており，思い出す度に懐かしくなります。近所の友達が大勢遊びに来たこともあり，日本にはないフレンドリーさに驚きました。ホストファミリーが日本の文化に興味を示してくれたので，遠い異国の人々に自国の文化を伝えることができたことをとても嬉しく思いました。

現地で生活する中で，心の充足を常に感じていました。これらはきっと，笑顔がそばにあったからだと思います。カンボジアの心の豊かさには，どんなに進んだ文明もかなわない，と思いました。

そして，現地で汗を流す青年海外協力隊員の方が話された「振れ幅が大きくてもぶれない自分の軸を築くには，多くの経験を若いうちにすることが大切だ」という言葉が忘れられません。今回の研修がこれからの自分を作り上げる大きな土台となることを確信しました。

また，帰国後，ポル・ポト政権による統治を進めていた主要人物のうちの一人が亡くなられたというニュースを見ました。現地に負の遺産として残るトゥールスレン博物館にも行き，命とは，平和とは，と考えを巡らせてきたばかりの私にとって，このタイミングで起きたことに何か意味があるように思えずにはいられませんでした。

「平和とは忘却との戦いだ。」

先日新聞でこの言葉を目にしました。カンボジアの人々は暗い過去を背負いながらも，懸命に前を向いて生きています。本当の異文化理解とは，その人々の背景にあるものを知らない限り決して出来ないものであることを学びました。

この充実した７泊８日の中での経験は，私の中で大きな財産となっています。支えてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。大成長した姿でまたカンボジアを訪れられるよう，日本での日々を意味あるものにしていきたいです。

ホストファミリー　本人：右から２番目

近所の子供達が遊びに来たとき

私はカンボジアが大好きだ

鹿児島中央高等学校２年
岩重　優奈

私はカンボジアで，人生で一番と言っていい程充実した一週間を過ごした。一週間という短い期間だったが，カンボジアを第二の故郷だと思えるのは何故だろう。そう考えたとき，街中にいる人たちの優しさ，ホストファミリーの優しさ，村の人の優しさが頭をよぎった。カンボジアの人たちは皆，また会いたいなと思わせてくれる優しさを持っていた。

街中をバスで走っていたとき，バスの中から手を振ったにも関わらず，街を歩いている人たちは笑顔で手を振り返してくれた。多分日本では手を振り返してくれる人は少ない。

ホストファミリーは私にとても優しくしてくれた。私が帰ってきたら，シャワーの用意をしてくれたり，私が美味しいと言った料理を何回も出してくれたりした。たくさんの優しさをもらった中で，特に印象深いのが，手縫いでスカートをつくってくれたこと。カンボジアでは大きな円筒状になった布を体に通し，余った部分をひねって腰に巻き付けてスカートのようにして着るのだが，初めてそれを着た私は上手に着ることができなかった。翌日，ホストマザーから渡されたその布にはウエストの部分にゴムが入っていて，スカートのようになっていた。とても着やすくて，何よりその優しさがとても嬉しかった。日本に帰ってきた今でも愛用している。

村の人は初対面でもとてもフレンドリーに話してくれた。ホストマザーと散歩をしていると，すれ違う人みんなが笑って話しかけてきた。言っていることはわからなくても，話しかけてもらえることが嬉しかった。

この一週間を終えて，私は，カンボジアと日本を「技術」と「人の優しさ」という２つの側面から見てみた。技術の面で見ると日本が進んでいると感じた。蛇口をひねればお湯も出るし，シャワーもある。クーラーだってある。カンボジアにはそういったものはなく，日本のほうが便利だと思ってしまった。だが，人の優しさという面で見るとカンボジアが勝っているのではないか。先述した通り，日本では有り得ない程の優しさをカンボジアでもらった。

今の日本は発達した技術に頼りすぎ，互いを思う気持ちが薄れている気がする。カンボジアだからこそ人々が協力し合い，人の優しさが自然と生まれているのではないかと考える。

確かに，今の日本の生活はとても便利だ。カンボジアに行って身をもってそれを実感した。しかし，便利さだけがその国の幸福度を決めるのか。その国の評価の基準となるのか。そうではない。日本と比べたら不便に見えるカンボジアでも，実際に生活してみるととても楽しかった。村とのお別れのとき「日本に帰りたくない。」と思う程，素敵なところだった。

私の得意分野は化学だ。将来はお世話になった大好きになったカンボジアを，化学の面からサポートしたい。感染症の研究や浄水システムの整備など，赤ちゃんからお年寄りまで助けられるような人になりたい。

また絶対カンボジアに行こうと私は決めた。私はカンボジアが大好きだ。

運動会に参加　本人：後列右

お別れ会でホストマザーと一緒に　本人：右

団員が感じたこと

新しい自分とカンボジア

いちき串木野市立串木野中学校１年
岩田　胡桃

今回，私は，言葉の壁や初めてのホームステイといった不安がありつつも，その問題に立ち向かうからこそ，新しい一歩を踏み出すチャンスだと思い，この事業に参加しました。私は，この事業で普段の生活では出来ないような貴重な体験をする事が出来ました。その中でも，特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は，小学校訪問での体験です。その小学校では一緒に運動会をしました。子供たちは，みな明るく笑顔であふれていて，男女問わず私に近寄ってきてくれました。ついこの間まで小学生だった私は，日本の子供たちは笑顔が少ないと感じました。カンボジアの子供たちみたいにもっと笑顔が増えれば，いじめや，不登校などの問題も改善されるのではないかと思いました。また，教育関係の仕事に興味をもつことができました。その理由は，小学校や中学校で活動している青年海外協力隊の隊員さんを見て，「かっこいいな。」と思ったからです。

二つ目は，ホームステイでの体験です。初めてのホームステイで緊張していた私に，ホストファミリーは本当の家族のように接してくれました。ホームステイ中に少し驚く出来事がありました。それは，晩御飯のとき，鶏肉が好きな私に，ホストファミリーが飼っている鶏を出してくれたことです。私はかなり驚きましたが，ホストファミリーと鶏に感謝して頂きました。ここまで，食べ物に感謝して食べたのは初めてでした。また，自然に囲まれて過ごした四日間で，日本の生活のありがたみを感じることができました。そのように感じた理由は，夜，電気のないところで食器を洗ったとき真っ暗で汚れが落ちているか分からなかったからです。このような生活をしてみて，自分は成長できたと思いました。そしてむかえたお別れの日，私とホストファミリーのお姉さんは大号泣でした。私もたった四日間でお別れなんてか寂しかったし，もっとこの村にいたかったです。温かく受け入れてくれたホストファミリーへの感謝の気持ちと，またこの村に行きたいという気持ちでいっぱいです。

私はこれから，様々な国に行ってみたいと思うようになりました。その理由は，その国の文化を実際に自分の目で見てみたいと思ったからと，沢山の国の友達を作りたいと思ったからです。なぜ実際に自分の目で見ないといけないかというと，私が思っていたカンボジアは行ってみると全く違い，実際に見ないと分からないことが沢山あると実感したからです。その夢を実現できるように，様々なところで役に立った英語や語学を勉強したいと思います。

最後に，私は青少年国際協力体験事業に参加して多くのことを学び，とても貴重な体験をする事が出来ました。このような体験ができたのは，たくさんの人の協力があったおかげです。本当に感謝しています。オークン（ありがとう）

カンボジアは私にとって第二の故郷です。

ホストファミリーと一緒に　本人：中央

現地の小学生と一緒に　本人：右

発展途上国に触れて

与論高等学校２年
朝岡　里紗

バイクと車で道が埋め尽くされ，クラクションの音が町中を飛び交う。発展途上国はものがない，汚い，お金がない，人が幸せそうでない場所だと思っていたが，そんなイメージは活気溢れる街の雰囲気に一気に飲み込まれた。

私はこの夏，約一週間，発展途上国であるカンボジアを訪れた。カンボジアは約 45 年前，ポル・ポト政権という独裁政権に支配されていた。政権は，国を指導する政権の者以外の知識層はいらないと考え，教師や医者など知識者を大量に虐殺した。また，政権に背く者も大量に虐殺された。強制労働や飢餓，虐殺で，約 200 万人の人が亡くなったと言われている。カンボジアは暗い歴史を抱える国である。外国からたくさんの支援を受けて，今もなお復興中である。しかし，発展途上国という言葉と現実にギャップを感じるほど，プノンペンは都市化が進んでいた。

都市部を離れ，６時間ほどのバス移動で街から緑に囲まれた農村地帯へ向かった。私はそこにある小さな村で四日間，村の日常を体験することになった。初めてのホームステイで期待と不安が交錯していたが，村の人たちの暖かい笑顔に包まれ，不安はすぐに消えた。村での生活は日本の生活とは全く違うものだった。水道設備は整っていなく，和式の汲み取り便所の横に水瓶と手桶が置いてある。トイレットペーパーもシャワーもない。もちろんクーラーも。教育が行き届いていなく，文字を読めない大人も多い。村の平均年収は 10 万円程と聞いた。初めて途上国の事実を目にして，日本との違いに驚きを隠せなかった。私には不便を感じることが多かった。しかし，カンボジアの人は誰１人として不幸な顔はしていなかった。鶏の声で気持ちよく朝を迎える。家族全員でご飯を食べる。雨が上がると畑仕事に出かける。日が暮れると家に帰る。自然の流れに身を委ねてのんびり生活している。夜になると，テレビがある家に村の人々が集まる。村の人が勝手に家の中を出入りするがそれは日常のことで，全員家族のようだった。異国人で言葉の通じない私を笑顔で受け入れ，優しさで包んでくれた。どんなときも笑顔で，誰に対しても敬意を払える素敵な人たちだった。カンボジアの人の暖かさに触れ，何か忘れていた大切なことに気づいた気がする。たくさんの幸せをもらった。

日本人が不便だ不幸だと感じることは，途上国の人にとってはどうってことのないこと。自分たちの価値観を決して押し付けてはいけない。それぞれの地で幸せの形は存在する。わかっていたつもりだが，何一つわかっていなかった。そんなところ行くな，と言われていたけれど「そんなところ」ってどんなところだろう。発展途上国という名前がつけられているだけで，私たちはいつのまにか上から目線になっている気がする。「かわいそうな途上国」を作り上げているのは私たちだ。カンボジアの方が日本よりよっぽど大切なものを持っている。それでもまだ課題の多い国。何かしたいというキモチをカタチにできるように。いつかまた帰ってこよう。オークン。

ホストシスターと村の友達　本人：左

ホストファミリー宅

団員が感じたこと

カンボジアで学んだこと

指宿高等学校１年
三浦　香苗

カンボジアで過ごした７泊８日は私が今まで過ごしてきた時間の中で最も濃く，忘れられない時間となった。その中でも，特に私の中で大きな学びとなったことが二つある。

一つ目は，支援は本当に必要とされている場所に行き届いているのかということだ。青年海外協力隊としてプノンペンで体育教師の指導をする活動をされている岡本さんの話では，「支援をするうえで一番簡単な方法は物資を提供することだけど，首都にはある程度の物はそろっている。でも，本当に物資を必要としている村や地域に物を行き届かせるだけの制度が整っていない。ただ物資を提供することがその国のためになるとは限らない場合もある。」とおっしゃっていた。確かに，その日に見たサッカーの試合の選手達の使用していたボールもユニフォームもいただいたものだと言っていた。でもそれは首都に限ることであって，本当に必要としている場所にものが行き届いていないというはがゆい現状。それを聞いて胸がチクリと痛んだ。

二つ目は，日本での生活がどれほど恵まれているのかということだ。カンボジアの村では蛇口をひねっても出てくる水は直接飲めないし，風呂やトイレは汲み置きの水を桶で汲んで流さなければならなかった。日本との大きなギャップに戸惑いを隠せなかった。私は今まで日本の暮らしに満足せず，小さな不満を見つけては不服に思っていた。でも村でのホームステイを通して，当たり前だと思っていた生活や小さな不満さえもぜいたくなものだったのだと痛感した。日本という恵まれた国から飛び出して異国から日本を見つめ直したことで，日本の新しいとらえ方や日々の暮らしの中に見出す価値観が大きく揺さぶられて，自分自身の成長に繋がったと思う。

私が今回学んだことは，カンボジアという異国へ行き，実際にそこに暮らす人々と一緒に過ごしたからこそ得られたものだと思う。カンボジアを訪れたことで国民の心の豊かさや優しさ，文化，街と村との発展や貧富の差があることなど多くを知ることができた。発展途上国というひとくくりの中のカンボジアしか見てこなかった私にとって，ピンポイントでカンボジアに視点を向けることができて貴重な体験となった。

そして，私は今回の派遣を通して，薬剤師になるという夢の他にもう一つの夢を見つけた。それは「青年海外協力隊としてカンボジアの発展の手伝いをする」というものだ。今回，国の内側に立ったからこそ見えたカンボジアの様々な課題の解決に，私も尽力したいと思う。そのためにも，まずは自分が誰かに誇れるような薬剤師としての専門的な技術や知識を身につけたいと思う。そしてそれを武器にして現地で活動していきたい。

最後に，応援してくれた家族，学校，友人，温かくむかえてくださったホストファミリー，支えてくれた団員の皆さん，同行者の方々，その他この派遣事業に関係した全ての方に感謝したい。オークン（ありがとう）。

ホストファミリーと近所の子供たちと一緒に　本人：右から3番目

ホームステイ先のトイレと水浴びをする場所

オークン（ありがとう）

赤徳中学校１年
井上　柊哉

僕はこの夏カンボジアに行き，日本では見ることや触れることができなかったものを体験することができました。

今回僕が行ったカンボジアは発展途上国です。僕は発展途上国は物が少なくて，「人々が不便な生活をして苦しんでいる」というイメージを思っていました。しかし，行ってみると思ったよりも物は充実していました。水道はありませんでしたが，市場に行けばペットボトルの飲料水が安く手に入り，洗濯などの生活用水は貯めた雨水を利用していました。また洗濯機，冷蔵庫，テレビなどの家電やパソコン，スマホなどの電子機器がある家庭もあり，フェイスブックなどのSNS も利用していました。僕の持っていた発展途上国のイメージとはずいぶん違っていて，とても驚きました。

僕がカンボジアで一番すばらしいと思ったのは，人と人とのコミュニケーションです。移動中のバスの中から僕が手を振ると，知らない人たちがいつも笑顔で手を振り返してくれました。僕たちが訪問した学校での生徒との交流でもそうでした。カンボジアの子どもたちは，初めて会う僕たちと，まるで前から友達だったかのように接してくれました。交流の後はみんなが僕たちと写真を撮ろうとして，まるでイベントの撮影会のようになりました。

ホームステイ先では夕食を家族全員で揃って食べたことが印象に残りました。日本では仕事や習い事などで家族揃って夕食を食べることが少ないです。ですから，ホストファミリーとみんなで食べる食事はとても楽しい時間でした。また，僕とコミュニケーションを取ろうと，クメール語だけでなく，自分たちが使える英語も使って会話をしてくれました。僕もなんとか知っているクメール語で会話をしようとがんばりました。

また，僕は奄美の楽器を紹介するために「六調太鼓」をカンボジアに持っていきました。太鼓の噂を聞きつけた村の人々がホストファミリーの家に集まってきました。僕の叩く太鼓を見て，村の人が太鼓を叩きたいと挑戦してくれました。その人の太鼓に合わせて僕が六調を踊り，みんなで楽しむことができました。言葉がうまく伝わらなくても仲良くなることができてうれしかったです。

僕はこの事業を通して，発展途上国と言われているカンボジアを自分の目で見ることができました。この事業に参加していなかったら，発展途上国がどのようなところなのかということ以前に，カンボジアが発展途上国だということすら知ることができませんでした。僕は発展途上国と呼ばれている国がどのようなところかを知ると同時に，カンボジアのすばらしさとカンボジアの人たちの優しさを知ることができました。これもすべて，両親や同行者の皆さん，関係者の方々，団員の皆さん，そしてホストファミリーのおかげです。僕はたくさんの人たちに貴重な経験をさせてもらえました。僕はその人たちに感謝の気持ちを伝えたいです。オークン（ありがとう）。

ホストブラザーとともに　本人：左

サマキーミエンチェイ小学校にて

カンボジア王国での７泊８日

（公財）鹿児島県国際交流協会　専務理事
寺園　直喜

台風５号が通過後の鹿児島空港国際ターミナルには次々に団員が家族と一緒に集まってきました。奄美大島からの団員は，飛行機が着陸できずに１名少ない結団式となりました。仁川国際空港では，鹿児島空港出発が遅れたことから，乗り継ぎ便へは駆け足の移動となりましたが，無事にカンボジアの地を踏むことができました。空港で時計を２時間戻しました。

翌日は，ＪＩＣＡカンボジア事務所で活発な意見交換を行い，ホームステイ先のタトラヴ村に向け日本が整備した国道６号線を西にバスで移動。シェムリアップ市街地手前で右折して，赤茶けた道をしばらく走るとタトラヴ村に到着。村での対面式開始時には団員１５名が全員揃い，団員から歓声があがりました。村滞在中は，地元警察の方が毎晩，警備をしてくださり，心強かったです。夜の見回りでは，団員がホストファミリーと一緒に楽しそうに食事や，暗い中，水瓶の水を使って水浴びをしており，異なる生活様式を素直に受け入れており，順応性の高さに驚かされました。翌日は，青年海外協力隊の深町隊員が活動しているオーオンバル小学校を訪ね，団員全員で絵画コンテストの最終審査員を務め，表彰式では，団員が「ふるさと」の合唱，「カンボジアの歌（アラピア）」を現地の小学生と一緒に歌い，交流を深めました。小学生の笑顔がとても印象に残りました。次の日は，我々の訪問に会わせて運動会を開催してくださったサマキーミエンチェン小学校で，団員も障害物競争，ムカデ競争に真剣勝負で挑み，１勝１敗の引き分けで終了。校庭の狭さにびっくり。ホームステイ最終日のお別れ会では，村の高校生による民族舞踊，団員による空手の演武，化学実験などの出し物を披露し，最後は，持参した法被を着て，全員が輪になり「おはら節」を踊り，楽しい時間が過ぎました。翌朝は，早い出発にもかかわらず，団員と一緒にホストファミリーが集まり，別れを惜しみつつ村を後にしました。プノンペンに戻り，井上隊員が指導する高校生のサッカーチームの交流試合を観戦し，井上隊員らとの夕食会では，団員が次々に質問するため，隊員らは食事を採れたかと心配になりました。カンボジア最終日は，「トゥール・スレン虐殺博物館」やバザールでの「値切り交渉」での買い物を楽しみ，深夜カンボジアを後にしました。

滞在期間中，団員の健康管理や急なスケジュール調整に対応していただいた同行者の方，また，村の様子や団員の取材に汗をかきながら駆け回ってくださったマスコミの方々に感謝申し上げます。カンボジアは，ハード・ソフト面で多くの課題を抱えていると伺っていますが，カンボジアの人々の選択に寄り添った支援の大切さを感じた体験事業となりました。

団員もきっと今回出会った人との交流を通して，改めて「人の幸せ」,「心遣い」を考えたのではないでしょうか。今回の体験が，訪問した団員だけでなく，団員のご家族，学校の友達，今後団員が接する人々に国際交流，国際理解，国際協力の大切さを拡げるきっかけになることを期待しています。鹿児島で御支援してくださる多くの関係者に心から御礼申し上げます。

ホストファミリーと　本人：右

カンボジアの田園風景

同行者が感じたこと

オークン（ありがとう）！そして，チョールチェット（好き）

青年海外協力隊カンボジア OG
丸野　里美

8月18日，今回の報告会で各団員の生報告を聴かせてもらった。実はこの日，本報告書の提出締切日でもあったが，報告会を経て感じたことを書かせていただく。

まずは，15人の団員と6人の同行者が，無事に元気に帰国できたことに感謝したい。これは，この事業を支える数多くの方々のお力はもちろん，21人の一人一人が気持ちを合わせることでしか実現しえないことだったと，今になってつくづく実感する。初日，悪天候で一緒に出発できなかった井上団員が，2日目に合流できるという奇跡が起こった時，14人の団員の心からの笑顔を見て，不覚にも一発目の涙を流してしまったことを白状する。

まだまだ多くのオークンは言い尽くせないが，各団員の報告で，「カンボジアが好きになった」との言葉に感謝したい。クメール語で「好き」は「チョールチェット」つまり，「心に入る」という意味。弓場会長が何度も言われた「まずは全てを受入れて」という言葉に通じる。言葉だけでは簡単に言えるが，帰国後熱を出してしまう団員もいたほど全力で参加した後の言葉としては，大きな意味を持つと感じた。

そして最後に一言，団員の皆さんに伝えたいことがある。

各団員の言葉に，この1週間で「考え方」「自分」「夢」が変わったとあった。私自身を振り返ると，青年海外協力隊員としてのカンボジア2年間の中で，「考え方」「自分」が変わった，というより「崩された」のは，派遣されて半年たってからだった。

小学校教師隊員として村の学校の教師を対象に教材つくりセミナーを開催する活動をしていた時の休み時間，普段は笑顔で話しかける一人のカンボジア人教師が，「私たちも，日本の教師と同等の給料をもらえば，あなたより頑張れるよ。」と寂しい目で言ったのだ。

その一言の後は，セミナーをどう終えて何を語ったのか記憶が無い。ただ大きなショックで涙が止まらなかったことしか覚えていない。当たり前のように教育を受け教師になり，学校備品の教材も十分そろった環境での教師経験を活かして，カンボジアの教師を相手に「定規の使い方も知らない！ゼロから教えなきゃ！」などと偉そうに張り切っていた自分がガラガラと崩れるのを感じた。「カンボジアの先生たちは，生活費の半分にも満たない給料で，教材も紙も定規も全て自分で買わなきゃいけない環境で，アルバイトをしながらもカンボジアの未来を良くしたい！と先生を続けている」ことを，知ってたつもりで解っていなかった自分に，なんと6カ月かかって気付いた。私の真のチョールチェットの瞬間。

今回の体験事業で様々な気づきや自分の変化を実感した皆さん，今回訪問して，見て，感じたカンボジアは，ほんの一部です。カンボジアでなくても，これから出会う様々な国や人，文化に対して，今回の体験を活かして，真のチョールチェットを目指してください。

運動会視察先での温かい出迎え　本人：右

チョールチェットがあふれる村のお別れ会　本人：左

同行者が感じたこと

国際協力体験事業の意義

青年海外協力隊カンボジア OB
佐藤　貴之
（現　三島村立大里中学校　教諭）

私は事前研修に参加することができなかったため，出発当日に初めて団員に会うことになった。どんな子たちなのだろうか。どれくらいカンボジアに興味があるのだろうか。途上国の生活を受け入れることができるのだろうか。不安な気持ちを抱えながら，空港へと向かった。しかし，その不安な気持ちは一瞬で消え去ることになる。「チュムリアップスーオ」から始まるカンボジア語での自己紹介。団員の顔つきに緊張がありたどたどしい話し方であったが，彼らの顔はこれから出会う異世界に立ち向かおうとする精悍なものであった。

ホームステイ先に到着すると，早速カンボジア語でコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。当たり前ではあるが発音，文法，単語のどれをとっても正確なものではない。しかし，指差し会話帳やボディランゲージを駆使して何とか伝えようとする子供たちに感動させられた。ホームステイの後半になれば，村を歩いていると笑い声が聞こえた。初めは伝えたくても伝えられないもどかしさがあり，涙する団員もいたが，自分自身ができることを考え，行動する子どもの適応能力の高さは目を見張るものであった。

ホームステイ先の人たちの生活は農業に従事している人がほとんどであり，決して豊かな生活をしているわけではない。それにも関わらず，日本人である我々に家族のように接してくれた。ホストマザーはご飯の進みが悪いと「仕事頑張れないよ」「しっかり食べなさい」と食べるよう促し，ホストブラザーとは普段の生活やカンボジアについて話をしたり，日本についての質問をされたりと時間を忘れて話をした。

楽しい時間はあっという間に過ぎ，お別れの日になった。朝早くにも関わらず，ホストファミリーの皆さんが見送りに来てくれた。４日間という短い時間ではあったが，私だけではなく団員も充実した時間を過ごせたと思う。それは彼らの表情を見れば一目瞭然であった。お別れに涙する子もいれば，泣かずに笑顔でお別れをしようとする子。ホームステイを通して感じたものはそれぞれが異なるだろうが，団員全員が「別れるのが辛い」と思ったことは間違いないだろう。

この体験事業は言葉などが制限された中で自分自身ができることを考え，行動する力を養うよい機会になったと思う。今できることを悩み，苦しみ，考え，行動する。失敗することもあったと思うが，この経験はこれから彼らが成長し，社会に出ていった際に必ず役に立つものだと確信している。

この体験事業を通して，私自身も学ぶことが多かった。日本に戻り，多くの子どもたちにこの体験を伝え，国際協力について興味を持ってもらいたいと思う。この度は，このような貴重な機会をいただくことができ，事務局，関係各所の皆様に感謝を申し上げるとともにこれからの団員の成長に期待している。

ホストファミリーと　本人：左

ホストファミリーとの別れ

カンボジアを通して見えたこと

青年海外協力隊ルワンダ OG
吉原　久美代

結団式での団長の「行くと決めて始めた時点で成功と言える」
の言葉通り，最後の最後まで出発を心配した団員もいた中，事前研修を受けた仲間全員で行けた！それだけで言うことなし！大成功！以上！と終わりたいが，そうもいかないか。

事前研修からも感じたが毎回，親御さんの理解協力なしでは成し得ない事業だと頭が下がる。そして今回痛感したのが，この事業も「平和」あっての事だという事。

今回は韓国が経由地であり，最近の日本との状態を聞くにつれ，不安も覚え考えさせられた。事実その後，一時的と願う鹿児島―韓国便が休止だと体験事業を行える事に感謝し平和を維持する努力が大事だと思った。

村で過ごす。村全体が一つの大きな家族の様だ。村の大人・子供に接して思うのが「この心からの余裕や表情は何なのだろう」と。一つは家族全員役割があり，何か絶対的安心感がある様な。まだまたその理由はありそうだが，こんな状況では虐待も起こる由がない。そして途上国の定義は難しいが，途上国と呼ばれる場所でいつも思うのが「動物がなんて幸せそうなんだ」と。家族同様の動物達を見てつういると，暑ければ動かず，寝たい時寝て，腹が減れば人間の残り物だが困らない環境。鶏は早いと２時半に鳴くのには早すぎ！とツッコんでいたが，日中は雛を引き連れ，食卓は屋外だったので，土に落ちている人間の食べ屑を食べ掃除をしている。犬・猫は人間の食事が終わった頃に残飯を頂戴しに出てくる。家によっては水浴び用の水溜に虫を食べる魚がいた家もあったと。卵も上手に紐で縛り買っていた。そう！自然に優しいゴミも出ない好循環な生活。気になる事はどこでも気になり，見ていて何がゴミになるかと言えば，便利な物と外部から持ち込まれた物。その中でも実は目立ったのは日本から持ってきたお土産の包装等と気づき自己満足だが，出来る範囲持ち帰る事にした。しかし後で，その場所でできるゴミの捨て方を実践している団員の話を聞き，現状で出来る事をする事こそ大事だと気づかされた。余談だが日本発祥と言われるトイレのウォシュレットはこんな地域の習慣がヒントでは？とふと思ったり。温故知新！見習うべきは見習い合おう。

誰もがバテそうな行程と環境の中，全員無事帰れた事は皆の努力と協力の賜と感謝である。健康面で深く関わり話ができた団員もいる中，そうでない団員もいた訳だが，私達は出会う機会を得た。団員には事業全体を通し「色んな大人がいる，大人も捨てたもんじゃない」と思う機会になっていればと願う。そして壁にぶち当たり悩む時は一人で抱え込まず，また周りにそんな人がいる時は，その事を思い出し，私達でもいいし周りの大人に話してほしい。大人に，誰かに話してみようと助言してほしい。そして平和で生き易い社会と世界を作っていく同志になろう。この素晴らしい事業が末永く続く事を祈り，携わって頂いた方全員に感謝し，参加できたことを誇りに思います

ホームステイ先の家族全員と　本人：前列右

話を聞かせてくれた歴史の生き証人と　本人：右

同行者が感じたこと

笑顔の大切さ学んだカンボジア

南日本新聞社　文化生活部　記者
山田　天真

「コミュニケーションで最も大切なのは笑顔」。今回の旅で一番実感したことだ。2度目の海外で，ホームステイは初体験。事前研修でカンボジア語を少し学んだとはいえ，実際にホームステイ先のタトラヴ村に入ると，ほとんど言葉が出てこない。初日はもどかしさとこれからの村での生活に不安が募った。

ホストファミリーも会話が通じない私に苦労を感じたことだろう。だが，常に笑顔で根気よく接してくれたおかげで，私自身は気持ち的にかなり楽になれた。時間の経過と共にお互いの言いたいことが少しずつ分かるようになると，笑顔も増え不安は消えていった。「笑顔さえあれば，海外でも何とかなる。万国共通の“言葉”」との思いを強くした。

私と同じような不安を抱えていた団員も，少なくなかったように思う。村に向かうバス内では顔がこわばり，ホームステイ2日目の朝も浮かない表情を見せていた。だが日ごとに笑顔が増え，取材にもホストファミリーとの日々を楽しそうに話してくれるようになった。成長していく姿を間近で見ることができ，頼もしさを感じずにはいられなかった。

カンボジアについては発展途上国という漠然としたイメージしかなかったので，都市部と農村部での大きな経済格差があることも知れてよかった。訪問時はデング熱が大流行。亡くなる人もいる中，訪問したシソポンのオーオンバル小学校でも複数の児童が発症していることを聞いた。レット・パーン校長の「ここでは重度の人を処置できる医療機関がなく，時間をかけて都市部に行くしかない。亡くなるのはきまって処置の遅れた田舎の人。近くに立派な医療機関があれば」という切実な思いは心に響いた。途上国と一言でいっても，「地域ごとに事情は異なり，求められる支援は違う」ことを思い知らされ，自分の目で現地を見ることの大切さを学んだ。

「ポル・ポトは悪い人じゃなかった。やり方はまずかったけど。」といった現地の人の声を紹介してくれた青年海外協力隊の深町菜摘さん（青少年活動支援）の話も興味深かった。あれだけ残虐なことをして非難すべき人物という認識が強かっただけに，立場，地域が変われば見方がここまで変わることに衝撃を受けた。現地の学校では，ポル・ポト政権時代のことはほとんど教えず，大人たちも子どもに積極的に教える雰囲気はないという。わずか40年ほど前の話で，悲惨なことを思い出したくないといった意向もあるのだろう。そうした状況にもかかわらず，「事実は事実として伝え，受け止め方は子どもたちにまかせたい」との思いで何とか教材として扱おうと，学校現場で試行錯誤する深町さんの姿はまぶしかった。

今回の旅は，日本との生活習慣，文化の違いに驚き，就寝前にいろいろと自問自答する時間を持てた。「幸せとは何なのか」「国際協力とは」―。日本に戻ってからも，いまだに考え続けている自分がいる。人生観を変える貴重な経験となった。つたない取材に毎回誠実に対応してくれた団員の皆さん，そしてカンボジアの人たちに感謝したい。オークン。

ホストファミリー　本人：左

取材風景　本人：右

驚きばかりのカンボジア

ＫＴＳ鹿児島テレビ放送　報道部　記者
髙吉　友佳

「カンボジア出張！？」上司の突然の打診に，二つ返事とはいきませんでした。海外に行くのは１０代ぶり…（※現在３０代です）ほとんど何も知らないカンボジアの，しかも農村でのホームステイ。私で大丈夫だろうか？初顔合わせまでは不安でいっぱいでした。

しかし，鹿児島での３日間の事前研修で団員の皆さんと過ごし，一生懸命カンボジアのことを知ろうとする姿や個性豊かで元気な様子に不安はすっかりなくなりました。

鹿児島から韓国経由で約６時間。首都・プノンペンの空港に着陸するやいなや，機内で流れるゆったりとしたカンボジアの伝統音楽が一行の到着を出迎えてくれました。外に出て感じる東南アジアのイメージ通りの蒸し暑さとあちこちから聞こえるクメール語に，随分遠くまで来たなあと心が躍ります。この時「甘いにおいがする！日本とは違う！」とうれしそうに話しかけてくれた団員がいたのに，鼻が詰まっていたのかわからなかったのが悔やまれてなりません！

カンボジアの景色は全てが新鮮でした。縦横無尽に走る車，見たことのない鮮やかな果物を道ばたで売る人…気が付けば四六時中カメラを回していました。

ホームステイ先での生活も驚きの連続です。部屋の中で荷物を整理していると，放し飼いの鶏がスッと足元を通っていきます。床に散乱する虫の死骸は何度踏んでしまったことか…。お風呂代わりの水浴び場に虫がたかってしまった日には，囲いも何もない野外で水浴びをした日もありました。しかし「住めば都」とはこのこと。ホームステイ終盤にはエアコンや冷蔵庫がない暮らしにも慣れていました。帰国後も，日常のふとした瞬間にタトラヴ村の日々を思い返してしまうほどです。

ある日の夕食時，ホストマザーが通訳を介して自分のことを話してくれました。私とさほど年が変わらないのに，夫を亡くして２人の子どもと７０代の母親を１人で養っていること。朝５時から１人で水牛や鶏の世話をして，米やネギを栽培し，日中はバイクで村を出て一人でスイーツを売る。新しい夫が子どもに暴力を振るうのが怖いからと再婚は諦めていること…。自分のことだけでも余裕がない普段の自分を見つめ直すきっかけになった出来事でした。村を離れる日の朝，団員とホストファミリーの涙のお別れを撮影しに早起きした私に，ホストマザーから結婚式の写真のプレゼント。団員よりも先に自分が泣いてしまいました。

取材をしていて，何よりも団員の皆さんが成長していく姿がとてもまぶしかったです。奄美大島の太鼓と踊りで村の人たちとつながったり，ジェスチャーと得意の空手であっという間に距離を縮めたり…出国当日は「このまま飛行機が飛ばなければいいのに」なんて不安を漏らしていた団員も，最終日には「タトラヴ村に帰りたい！」と言っていたほど。大人でも難しい「国際協力」や「開発途上国」といったテーマに対して，決して背伸びせずまっすぐ向き合っている姿に，私の方が刺激を受けました。

振り返れば，私も若い頃に４７都道府県に足を運んで「地方の現状をもっと知りたい，できればそれを伝える仕事がしたい」と思ったことがきっかけで，いま地元の東京を離れてこの仕事をしています。今回のカンボジアでの出会いや貴重な経験は，必ず団員の皆さんの一生の財産になると思います。素敵な８日間に同行させていただき本当にありがとうございました！

ホストファミリーと　本人：中央

地元の小学生とのお別れ　本人：中央

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1　趣　　旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し，そこの国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで，国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校，施設などでの交流を通して相互理解を深め，国際性豊かな人材を育成する。

また，派遣後は，これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2　事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」
※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県ＯＢ会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会
共催：鹿児島県内の関係市町村
後援：独立行政法人国際協力機構九州センター，鹿児島県，鹿児島県教育委員会
協賛：鹿児島県内の企業

3　派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4　派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した１０～２０名の中学生，高校生，専門学校生
同行者：実行委員会関係者と新聞社，テレビ局など報道関係者
共催市町村職員

5　実施時期

７月下旬～８月上旬の間の１週間程度
派遣の前後に事前研修会，報告会なども実施

6　経費

この事業の実施に要する経費は，実行委員会の構成団体，協賛企業，共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国（地域）	派遣期間	人数（生徒数）	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア（ｺﾀｷﾅﾊﾞﾙ，ｻﾘﾏﾝﾄﾞｩ）	平成３年 3/27(水)～4/3(水)（7泊８日）	17名（10）	鹿児島市，阿久根市，名瀬市，市来町，伊集院町，祁答院町，内之浦町，佐多町	公募
第2回	マレーシア（ｽﾌﾞﾗﾝﾍﾞﾗ）	平成４年 3/27(金)～4/3(金)（7泊8日）	17名（10）	鹿児島市，鹿屋市，大口市，指宿市，隼人町	公募
第3回	マレーシア（ｸﾁﾝ，ﾃﾗｶﾞｱｲｰﾙ）	平成５年 7/23(金)～7/30(金)（7泊8日）	17名（10）	鹿児島市，加世田市，三島村，隼人町，志布志町，高山町	公募
第4回	インドネシア（ﾊﾞﾝﾄﾞﾝ，ﾊﾟｼｰﾙｶﾘｷ）	平成６年 8/1(月)～8/7(日)（6泊7日）	15名（9）	鹿児島市，出水市，指宿市，垂水市，菱刈町，霧島町	公募
第5回	マレーシア（ｺﾀﾊﾞﾙ）	平成７年 7/30(日)～8/6(日)（7泊8日）	16名（10）	鹿児島市，国分市，頴娃町，宮之城町，隼人町，吾平町，根占町，中種子町	公募
第6回	マレーシア（ﾀｲﾋﾟﾝ，ﾊﾟﾘｯﾄﾑｿﾝﾄﾘｰ）	平成９年 7/27(日)～8/3(日)（7泊8日）	16名（11）	鹿児島市，串木野市，東市来町，伊集院町，郡山町，日吉町，吹上町，金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア（ｸﾁﾝ，ﾃﾗｶﾞｱｲｰﾙ）	平成10年 7/26(日)～8/2(日)（7泊8日）	25名（20）	鹿児島市，大口市，国分市，菱刈町，姶良町，蒲生町，溝辺町，横川町，栗野町，吉松町，牧園町，隼人町，福山町	市町村推薦
第8回	タイ（ｱﾕﾀﾔ，ﾙﾝｶｰｵ）	平成11年 7/30(金)～8/5(木)（6泊7日）	14名（9）	鹿児島市，指宿市，加世田市，喜入町，笠沙町，知覧町	市町村推薦
第9回	タイ（ﾁｪﾝﾏｲ，ﾒｰｶﾝﾎﾟﾝ）	平成12年 7/24(日)～7/31(月)（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，鹿屋市，国分市，垂水市，祁答院町，財部町，末吉町，串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム（ﾎｰﾁﾐﾝ，ﾌｰﾎｲ）	平成13年 7/20(金)～7/26(木)（6泊7日）	19名（13）	鹿児島市，出水市，加世田市，国分市，垂水市，祁答院町，溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム（ﾎｰﾁﾐﾝ，ﾀﾝﾋﾞﾝ）	平成14年 8/4（金）～8/10(木)（6泊7日）	17名（11）	鹿児島市，串木野市，枕崎市，国分市，垂水市，溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ（ﾅｺﾝﾗﾁｬｼﾏｰ県を予定していた）	平成15年度 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア（ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ，ﾏﾗｯｶ市，ﾄﾚﾝｶﾞﾇ州）	平成16年 7/19（月）～7/26(月)（7泊8日）	13名（9）	鹿児島市，枕崎市，国分市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム（ﾊﾉｲ，ﾎｱﾋﾞﾝ省ﾓｰﾊｲ村）	平成17年 7/24（日）～7/31(日)（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，枕崎市，串木野市，国分市，知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア（ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ，ﾏﾗｯｶ市，ｻﾊﾞﾗｲ）	平成18年 7/22（土）～7/29(土)（7泊8日）	18名（12）	鹿児島市，枕崎市，霧島市，知覧町 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム（ﾊﾉｲ，ﾊﾞｸｻﾞﾝ省，ﾊﾞｸﾆﾝ省）	平成19年 7/22(日)～7/29（日）（7泊8日）	23名（17）	鹿児島市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，知覧町，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス（ﾋﾞｴﾝﾁｬﾝ県ﾎﾟﾝﾐｰ村）	平成20年 7/20（日）～7/27日（日）（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス（ﾋﾞｴﾝﾁｬﾝ県ﾅｰｿﾝ村）	平成21年 7/19（日）～7/26日（日）（7泊8日）	18名（14）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア（南ｽﾗｳｪｼﾞｼﾏﾋﾞﾅﾊﾞｻ村）	平成22年 8/1(日)～8/8(日)（7泊8日）	19名（13）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，南九州市，南さつま市，枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア（ｸﾗﾝﾀﾝｼﾏﾁｸﾊﾞﾝﾃﾗｶﾞ村）	平成23年 7/24(日)～7/31(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム（ﾎｰﾁﾐﾝ市，ﾃｨｴﾝｻﾞﾝ省ｳﾞｨﾝﾄｫｲ村）	平成24年 7/22(日)～7/29(日)（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，南九州市 南さつま市，枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム（ﾀﾞﾅﾝ市，ﾎｲｱﾝ市）	平成25年 7/21（日）～7/28（日）（7泊8日）	23名（17）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市 いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア（ﾌﾟﾉﾝﾍﾟﾝ，ﾊﾞｯﾀﾝﾊﾞﾝ）	平成26年 7/20（日）～7/27（日）（7泊8日）	23名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市 南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア（ﾌﾟﾉﾝﾍﾟﾝ，ｶﾝﾀﾞｰﾙ）	平成27年 7/19（日）～7/26（日）（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，いちき串木野市，南さつま市，南九州市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス（ビエンチャン都，ビエンチャン県）	平成28年 7/24（日）～7/31（日）（7泊8日）	20名（14）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，南さつま市，南九州市，枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス（ビエンチャン都，ビエンチャン県）	平成29年 7/23（日）～7/30（日）（7泊8日）	22名（16）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，いちき串木野市，南九州市，南さつま市，枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第27回	スリランカ（西部州，ガンパハ県）	平成30年 7/25（水）～8/1（水）（7泊8日）	21名（15）	鹿児島市，鹿屋市，枕崎市，霧島市，南九州市，南さつま市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第28回	カンボジア（ﾌﾟﾉﾝﾍﾟﾝ，ｼｪﾑﾘｱｯﾌﾟ）	令和元年 7/21（日）～7/28（日）（7泊8日）	21名（15）	鹿児島市，鹿屋市，霧島市，いちき串木野市，南九州市，南さつま市，枕崎市，実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計7カ国	計（361）平均13人			

＝編集・発行＝
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
〒892-0816　鹿児島県鹿児島市山下町 14-50
かごしま県民交流センター１階
公益財団法人鹿児島県国際交流協会内
担当：新井　博美，　外西　朋子
TEL：099-221-6620　　FAX:099-221-6643
裏表紙デザイン：　岩田　胡桃　（串木野中学校　１年）